

旅日記1998

東南アジアを放浪記

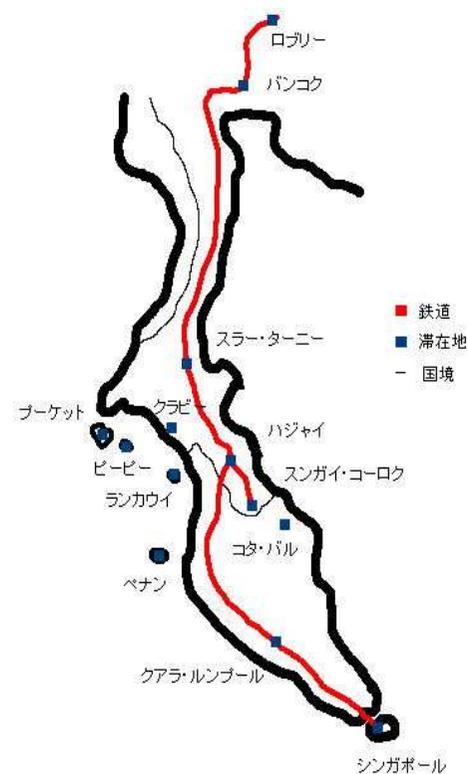
タイ・マレーシア・シンガポールへ40日

20歳にして初の海外旅行
そして、この旅こそがタイ好きの原点
40日の気ままな旅を通し
出会った人々、起きた出来事
全てが今の自分を作り上げている
旅の途中毎日書いた日記と
その時々感じたことをまとめたコラムをもとに
学生時代に作成
学生時代の自分を振り返れる、思い出の旅日記

旅日記1998

東南アジアを放浪記

タイ・マレーシア・シンガポールへ40日



(1) 出発にむけて

前書き

海外で生活する人達の話聞き、旅行小説を読み、漠然とした憧れがあった。日本にはない、東南アジア独特の雰囲気を感じた。それだけではない。自分とは何か分からず、違う世界で自分の存在を確かめたいとも思った。

いろいろな理由はあった。しかし、これだけは確かだった。刺激がほしかった。それが実現できるのは、人間が熱い東南アジアしかないと思った。

動機

旅を現実的に考え始めたのは大学2年の夏。2ヶ月程度の長期の旅を考え、時間が取れる大学2年の春休みを旅の時期とする。元来一人でいるのが好きでマイペース派を自負する自分としては、一人で旅すること以外考えなかった。

夏休みからは、多くの本を読んだ。頭の中で具体像を描きたい性格から、いろいろな情報を集めようとした。そこで出会ういろいろな人の価値観に触れ、思いは強くなっていった。東南アジアを選んだ理由は、生きることへの熱さがあると思ったから。必死に生きるというか、一生懸命生きるというか、どこかクールに生きている自分の憧れでもあり、そこで自分も熱く生きたいとの思いがあった。

東京で生活し、自分の世界を作れることの気楽さと、孤独感という寂しさを知った。そして、自分の奥底にある感情が、また違う世界に身を置き、新たな自分を見つけることを欲していた。

準備

旅の準備をする上で出会ったのが、バックパッカーズ読本。この本のおかげで、一度も海外へ出たことのない自分でも十分な準備と心構えを持つことができた。

旅の期間は、一応大学の授業開始を考えて長くて二ヶ月。航空券は、最大限の余裕を持って、60日のオープンチケット（期間内の便ならいつでも乗れるチケット）を購入。会社は、パキスタン航空。たまに落ちることがありちょっとスリリングだが、安さとオープンチケットの存在が決め手となる。直通なら6、7時間程度が、マニラ経由のため9時間要するのは、安さと引き換えに受け入れたデメリット。

(2) 異国人との出会い・・・バンコク

出発当日（1998/2/10） 1日目

サークルのスキー合宿を終えて3日後、ついに時は満ちた。15時出発のパキスタン航空、指定された集合時間は13時。雪の降る中、荷物を減らすためTシャツに長袖シャツという服装で、計算した所要時間に1時間をプラスして家を出る。

家を出て30分。順調に進んでいると思った計画に早くも狂いが始まる。新宿で成田特急に5分違いで乗り遅れ鈍行で行くことになったのだ。津田沼駅に着いたのが集合時間1時間前。成田までは乗り換えもあり、津田沼から1時間半かかるという。しゃれにならん、本気で焦ってきた。飛行機に乗れなければ、そこで終わり。電車より早いもの、もうタクシーしかないとの結論に至る。

タクシーの運転手が、焦って乗り込み、必死で事情を話す姿に同情するように静かに語る。「航空券に書いてある集合時間は、関係無いみたいだよ」どうやら、ツアーではなく個人旅行で参加する人に集合時間などあるはずもなく、搭乗1時間前までに行けば十分というのだ。

知らないということは怖い。自分の甘さと無用な不安を抱えたことに後悔し、最初の授業料1万5千円を支払い、日本を後にした。

飛行機

飛行機には何度か乗っているが、乗り慣れているわけじゃない。飛行機が飛び立つ度に遭遇するなんとも嫌な状態。なんか落ちるような予感。いつものように腹をくくる。自分が乗っているときに落ちるはずがない、落ちたら運命。そう割り切れば、飛行機も楽しい乗り物に。

飛行機での思わぬ出会いは、楽しみの一つ。食事が配られた時、隣の席のおじさんに話しかけられた。食事の材料が何なのかという内容で、そこから仲良くなりお互いに自分のことを話す。彼はパキスタン出身で、日本には仕事で何度も来日しているという。出発してからの初めての外国人との会話に、幸先のよさを感じつつ。

この旅で利用したのはパキスタン航空。マニラ・バンコクを経由してのパキスタン行き。タイに着く前に、その北にあるフィリピンのマニラに立ち寄る。マニラ着陸後、客はロビーに移動し、機内清掃を行うという仕組み。皆飛行機から下りる中、自分がとった行動。その場で、待機。結局おいてきぼりの可能性がある外に出る危険を避け、邪魔を承知で椅子に座り続けることに。さすがに拘束9時間の移動は疲れたが、その分思い出も多くできて。

ドム・ミアン空港

夜中の22時、ついにバンコク入り。15時に出て9時間一時差2時間、予定通りの到着。ロビーに出ると熱い空気が肌に触れる。ついに灼熱の国タイに来たのだ。さっそくタイパーツを手に入れるため、トラベラーズチェックと交換。そして、深夜に着き宿泊所確保が困難なため日本で予約しておいたホテルに向かう。タクシーを移動手段に選択するも、お金の価値が分からないままの支払いは嫌なもの。この旅唯一の高級ホテルでの一泊を満喫し、最初の一日を終えた。

出会い（2／11） 2日目

2日目、この日に運命的な出会いが待っていた。

この日、タクシー代を浮かすため、ホテルを出てバンコクの安宿街カオサンまで歩いて行くことを決意。地図を見る限り、空港からホテルまでの距離とホテルからカオサンまでの距離は同じようなもの。体力には自信がある、歩いていけるはずと。

そんな当初の威勢も、25度を超える暑さの中、ばてるまでそう時間はかからず。道に迷い、自分がどこにいるのかさえ分からない。昼近くになり太陽の光も強くなりだし、とりあえず道路脇に生えている木の影で少し休憩をとる。

自力での移動はやっぱり無理、次に通るタクシーに乗ろう、次に通る人に道を聞こうと思いつつ、もう一つ思い切れず、ただ目の前に流れる景色を眺めるまま数十分。行動を起こさなくては何も起こらないと意を決し、一人で歩いてくる女の子に声をかける。

とりあえず、自分のおかれている状況、ここにいる理由を話すと、彼女も自分のことを話してくれた。彼女の名前は、オレ。大学生で、今から大学に行く途中だという。自分も大学生だということから、勉強内容など会話もはずみ、とりあえず近くに大学があるから昼飯でも食べながら話そうということに。せっかくだからと喜んでついて行き、カフェテラス、いわゆる学食でご飯をごちそうしてもらおう。

日本とタイの違い。それは人間同士の付き合いだろう。日本は付き合いえば深い、知らない人とは挨拶さえしない。なるべくお互い干渉せずに生きようとする。そうすることで、余計なトラブルを避けることも出来るし、これからの人間社会のあり方ともいえる。俗にいう恥の文化、これは象徴的な例の一つだろう。タイの場合はどうか。彼らは、誰にでも声をかけるし、それは外国人であっても変わりはない。そのため、出会う人とは知り合いで終わらず友達となり、みな仲がいい。当然大学内での友人数は日本の比ではない。

2人で食堂に入ると、次々と彼女の友達が話しかけてくる。そして、特に仲のいい3人と一緒に食事をすることに。自分が日本からきた大学生であること、タイに来た理由などを話すと、彼らは初めて見る日本人に興味を示し、いろいろな質問をしてきて会話が弾んだ。会話の途中、カオサン通りへの行き方の話になると、皆が声をそろえていう。「あそこは危険なところだ。そこに行くくらいならここに泊まればいい、自分達の寮に泊めてあげる」と。まるでドラマのような展開。せっかくだ出会った人達と仲良くなりたくて、もっとタイ人のことが知りたくて、喜んで好意を受け入れ、大学での生活が始まった。

カセットサート ユニバーシティにて 2日目午後

午後からは、食堂で出会った男子学生3人のうちの2人に大学を案内してもらおう。国立大学であるこの大学は半端な広さではない。校内にバスや車も走り、結局最後まですべてを見ることは出来なかった程の規模。主な建物を案内してもらった後、サンダルと短パンを探しに、買い物に付き合ってもらおうことに。

どちらも暑さをしのぐためには必須アイテムで、どうしても手に入れたかったもの。学校の外に出て近くの商店街を物色。短パン、そしてバスタオル用に大きめのタオルを買おうとした時、彼らが一言「自分のが余っているから貸してあげるよ」結局買ったのは、サンダル40パーツ一品だけだった。

彼らに対して尊敬してやまないこと。親切なことを普通にやっつける。自分なら、相手の喜びそうなことを頭で考えてから実行する。そこには、人が喜ぶことで自分が満足するという自己本位な部分がある。ところが、彼らはそんなことを微塵も考えていない。

一度こういうことがあった。自分が先にベッドに入り、扇風機の首が回るように設定して寝ていた。しばらくして友人が入ってきたのに気付いたが、そのまま目を閉じ横になっていた。彼は何をしたか。扇風機を固定し、寝ている自分にだけ風があたるように設定したのだ。暑さというものは寝るまでが暑い、寝てしまえばそう感じないものなのに。どこから見ても、自分は寝ていた。相手の状態に関わらず、常に同じ行動をとる。小さい頃から言われ続け、何も見返りのない結果を散々体験し、すでに否定していた言葉を彼は実践していた。

ここで、2人の友人の紹介しておこう。パングとバスだ。彼らには、大学での生活のほとんどをお世話になった。パングとは毎日の食事から洗濯、暇潰しと多くの時間を一緒に過ごした。だいたいいつも入り浸っていたのも彼のドミトリーだった。バスとはなぜか妙に気があった。彼といるといつもハイテンションで、ばかなことを言ったり、時に真面目に語り合ったりと、心からの親友となった。パングはサイエンスを、バスはフォレストリーを学んでいて、年は18、大学一年生。

こうして、新たな友人と出会い、いろいろなことを感じながら2日目を終えた。



洗濯場でパングを。洗剤を借りて毎日ここで洗濯をしていた。

出会った友人達、そして大学生活

大学に来た初日にも関わらず、友人が友人をよび、どんどん増えていく友人達。彼らのつながり方に驚く。大学の様子とあわせて、紹介する。



大学寮パングの部屋で。寮は、基本3人の相部屋。ここは、パングの部屋で、左からバス達の友人、バス、パング。



日本人が来ていると噂を聞きつけて来た大学生。知識・価値観・かもしだす雰囲気、彼は出会った中で一番優秀な人間だったな。彼も自分のことを認めてくれたのかな。いろいろなことを話して仲良くなる。



パンクの部屋の先輩達。左から3年生ポックと4年生。やっぱり4年にもなると落ち着きがあったな。3年の彼はおもしろおかしくいろいろやってくれてました。



大学寮の風呂とトイレ。風呂といっても、水ためがあり、小さな桶で冷水を体にかけるという使い方。石鹸・シャンプー等は各自持参で使用する。朝はほんとに冷たく、毎度気合を入れつつ水をかぶっていた。トイレも同様、水ためがあり小さな桶付き。東南アジアには、紙を使用する習慣がなく、これできれいに事後処理を行う。



大学寮の前の庭を。庭の先には池がある。たまに釣りをしている人も。庭では夕方からサッカーが始まる。



カフェテラス前の食事売り場。いろんな食べ物屋が並んでいて、大学生は格安料金。いつも大学生として利用していたな。ご飯と2、3おかずが付いて10B程度（30円）。友達と一緒に食べる時は、いつも奢ってもらってばかりいて。

イーサンクラブ (2/12) 3日目

3日目の午後、授業を終えたパングのドミトリーの一員・大学3年生のポックに連れられ、彼の所属するイーサンクラブに遊びに行く。イーサンとは、タイ北部地方をさす言葉。農業学を主とする大学の特徴か、ここの生徒は北方出身者が多い。そこは伝統楽器の演奏をおこなうクラブで、部室に行った時にはすでに多くの人で賑わっており、そんな中ポックが皆を紹介してくれ、自分も自己紹介をした。

ここでは、過去の戦争のこと、日本の軍事力や経済について熱い討論などもしたが、なにより良かったのは、日本語を勉強しているという大学2年生トオを中心としたグループと仲良くなったこと。トオはしっかりしていて、お互いに認め合えるような存在としていつの間にか仲良くなり、自然にグループの中に入っていた。その晩は、彼らと一緒に夕食をとり、翌日一緒にバンコク市内観光に行く約束をして、別れた。結局その夜は、市内観光の待ち合わせが翌朝5時ということもあり、目覚し時計を借りてさっさと就寝した。



上:イーサンクラブの部室にて。むちゃむちゃきれいな子がいたから、お願いして写真撮らせてもらう

下:仲良くなったクラブの友人達ととった夕食。左手前が、トオ。

ワット・プラケオ (2/13) 4日目

朝5時の待ち合わせ、4時半に起きて、シャワーを浴び、髪をセットして待ち合わせ場所に向かう。部室の前で待っている間、どこからともなく蚊が集まってくる。誰も来ないまま、約束の時間を数十分経過。集合時間を5分遅れたのがまずかったのか、それとも時間を聞き間違えたのか、結局1時間待って、諦め部屋に戻る。目を覚ましたバスが部屋にいる自分に質問、「観光はどうしたの?」。「勘違いかな」、力なく答え再び床に就いた。

朝11時、パングの部屋でのんびり過ごしていると、やってきたのはトオ達。すぐに「朝待ってたのにどうしたの? AM5時って言ってたよね?」と確認。彼らは、そういう間違いをしたのかという感じで

笑い出すも、理由は結局分からないまま。ただ、なんとなくAM11時の別の表現であったことだけは確かのように。そして、今から出かけようということになり、楽しみにしていた予定の復活に素直に喜び、急いで出かける準備に取り掛かる。

総勢10名での観光は楽しいもの。行きはタクシー、5人ずつの相乗りで。船乗り場に到着後、船に乗り換え、水上を移動。普段使わない乗物に乗れた嬉しさと、彼らと出会えたから利用できた喜びをかみしめ、観光名所を眺めつつ目的地へ向かう。

街の中心にあるワット・プラケオは、タイで最高の地位と格式を誇る王室寺院で、バンコクの観光名所でもあり、建物も素晴らしいの一言。入場には外国人のみ有料という制度があり、タイ人になりすませば素通りできるとの彼らの誘いを受け、その場限りのタイ語での挨拶の練習をするも、結局気の小さい自分は、素直にチケットを買って入ることに。

とにかくタイのお寺は豪華。建物自体が金で輝き、日本ではお目にかかれないような代物ばかり。周りの壁には、仏教にまつわる物語が描かれていて、その内容一つ一つについてトオによる英語の解説を聞く。これはさすがに驚いた。はっきり言って、知らない単語が多くてよく理解できなかったけど、歴史を英語で説明するとは。付け焼刃的な日常英会話程度の自分に、少々恥ずかしさを感じて。今回の大勢での行動は、皆でわいわい非常に楽しく、いろいろ話もできたし、旅の大きな思い出になった。



友人達との船での移動



ワット・プラケオで

ワット・プラケオとは、エメラルドブッタが祀られる通称エメラルド寺院。観光客は100Bと入場料が必要となる。タイ人は無料で、お前も無料でいけると入口前で「私はタイ人です」と片言のタイ語のレッスンを受ける。でもね、ここでそんな後ろめたいのも嫌だし、そもそも気の小さい自分はそのようなリスクはいいからってお金を払って入ることに。使えるお金があまりないのを知っているから、みんないろいろ助けてくれるのよ。この観光でも食事とか飲物おごってもらっていたしな。本当に、彼らの困っている人を助ける心はすごい。信心深い仏教徒であることもあるだろうけど。この寺院はバンコクで一番有名なもの。金ぴかで美しいの一言です。



ワット・プラケオ隣の旧王宮で総勢10名の記念写真。

ビアガーデン

この日の夜は、バスやその友達と皆で酒を飲みに行こうということになり、学校前のビアガーデンに繰り出す。朝・昼・晩といつも学食で食事をしていたから、ガイドブックに載っている有名タイ料理が食べたくなり、シンハービールと共にソムタムとトムヤムクンを注文。どうしても食べてみたかったこの二品をおかずに、タイのビールを流し込む。本場屋台の味ソムタムは、辛くて食べられたものではなかったが、記念だと思って奮闘。トムヤムクンも辛さで正直味のほうはよく分からず。酒があまり強くないながら、すすめられるままジョッキ2杯半口にし、ほろ酔い気分でふらふらと楽しむ。

この日の夕方は、飲みに行く前からバスと2人でメモ帳片手にお互いの価値観について、いろいろな分野で話し合っていた。それは、場所を移動してもやむことはなく、ハイテンションで盛り上がりながら、宗教や大学などについて真剣に熱く語り合った。

彼は自分の国や宗教に誇りを持っている。タイでは国民が国王ラマ9（プーミポン国王）を尊敬し、王室に誇りを持っている。自分達が今いるのはそういう歴史のおかげだとよく知っているからだろう。国というのはそうあるべきである。

王室という同じ制度を持っている日本では、根本的な敬うという気持ちに欠けている。僕達は教育の過程で、天皇は戦争を起こした原因と習う。彼らは、僕達と同じ人間に過ぎないと習う。戦前生まれじゃないし、ことさらそんなことを強調されても、天皇をけなしているとしか受け取れない。当時の状況、日本の追い詰められた立場、資源の

ない日本が生き残るための条件を冷静に考えてみれば、答えは明快。

アメリカに、お前達は戦争をしたから悪いと言われ、皆が信じ込んで反省している。日本の間違った人達が、権力のある人達が頭を下げることに快感を覚え、反権の象徴として日本を追い詰めている。いつまでも成長の無い韓国人がそれをネタに国をまとめようとしている。僕達はそろそろ気付かなければならない。僕達は何も反省する必要はないのだ（少なくとも諸外国に強要される覚えは無い）。今の平和国家日本で過去のことを検証しても意味がない。誰が戦争を起こしたのでもない。国民が戦争を盛り上げていったのだから。テレビで偉そうに語る老人には、いまさら被害者面するなど言いたい。むしろ亡くなった自分達の仲間を誇りにすべきだ。僕達の今があるのは、戦場に戦いに行った祖父たちのおかげ。靖国神社への閣僚参拝は、毎年さも悪いことのようにテレビで報道される。国のために命を投げ出した人達へ、当国の首相の敬礼さえ許されない国。くさっている。

日本をよりよくするための意見なら謹んで受け入れよう。一部の人の、日本を陥れるための意見など頑として拒まなければならない。そういう意味で、皆が一つにまとまっている彼らの姿はうらやましかった。いつか日本がこういうふうになることを切に願った。

午前2時を回り、締めの時となった。バスが、「明日はバレンタインデーだから好きな子のドミトリーに行く」と嬉しそうに言ったのが印象に残った。



上・中：大学前スーパーの広場で夜営業するビアガーデン。手頃なビールとタイ料理を味わえる。

下：なんとビアガーデン前の普通の道路に象出現。えさを買い与えるシステム。街中を普通に歩く象を思わず見に行く。

バレンタインデー（2/14） 5日目

今日は、昨日遅く寝たので10時30分に起床。目が覚めるとパンクの部屋の掲示板に Good night to Hiro の文字が。なにげないメッセージに温かさを感じ、朝からなんか嬉しくなる。

いつもは、授業のため8時前に起きる学生と一緒に起きていたが、今日は大学が休み。部屋に来た友人・大学4年生のウィーと食事を取り、彼に大学を案内してもらうことに。ウィーは、なぜか僕をしたってくれていたから、気軽に付き合えて、何度か二人で食事をしたりしていた。今日は予定がなく暇だったので、喜んでついて行く。

メインは、彼が勉強しているフォレストリーのファカルティー（学部の建物）に行き、勉強の内容を紹介してもらうこと。寮から、学部の建物まで結構距離があるから、自転車に2人乗りをしての移動。その後、近くにある彼の所属するクラブに行きくつろいでいると、思わぬ方向に話が広がっていく。

道で出会った、彼と同じクラスの女の子のドミトリーに行くことになったのだ。タイでは、男子寮と女子寮は別々に別れていて、気楽に入れる男子寮と違い、女子寮は高いフェンスで仕切られ、入り口にはゲートと監視員がいるという堅甲なセキュリティ付き。この日バレ

ンタインデーは、男子が女子寮に入れる数少ない機会の一つだと言う。皆から散々お前はラッキーだと言われ、喜んで付いていくことに。



今日も夏晴れ、いい天気。自転車に二人乗りでウィーと学内散策。どうせ撮るなら自転車に乗ってと、大学本部と思しき建物を背景に。

女子用のドミトリーは5人用で、整頓されていて非常にきれい。彼女のドミトリーに男女12人が集まり、たくさんの食物と飲み物を囲んで宴が開始。酒などないが、異国人という長所を生かし、盛り上がる会話に交じっていくつもりだったものの・・・

大事なことを言い忘れていたが、この日の体調は最悪。昨日飲んだビールに入っていた氷でやられたんだと思う。腹の調子は悪いし、昨日食べたスパイシーフードの数々で、胃がひくひくして。既に2回トイレに駆け込んでいたが、どうしても落ち着かない状態で、食物にもろくに手を付けられず。当然気乗りもせず、盛り上げたかった女の子との会話も、一人沈んで最悪の空気をもたらすことに。そう言えば、あれ以来彼女達からの誘いが無いところを見ると、よっぽど酷かったと見える。

ドミトリーに帰ると、どうもバスがうまくいかなかったらしく少し落ち込んでいた。朝早くから花を持って彼女のところに行ったらしい。彼の純粹なところもまたいい。



バレンタインデーに女子寮にて。やっぱり男子寮とはかもし出す雰囲気の違いが違います。どこかきれいだし、どこか明るい。みなで飲物や食べ物を持ち寄り、わいわいと話していました。もう少し体調がよければ・・・。せっかくの場だったのに残念で。

コラム：「友人」

タイの学生には友人がたくさんいる。当然彼らの友人を紹介されるから、瞬く間に友人が増えていった。移動するたびに友人が増えていくという感じだ。バスといるといつもハイテンションでばかをやってきたから、紹介された人達は、日本人がこんなにおもしろい奴だとは思わなかったとよく言っていた。やはり、日本人は真面目という印象があるようだ。

当然人間人それぞれに性格があるように、いくら環境に左右されても、根本的な部分は変わらない。タイ人の寛容さで、多くの人に受け

入れてもらったが、当然あまりあわずにほとんど話さなかった人もいた。自分がもともと偏見など持たずに人間同士として付き合うので、多くの外国人とも仲良くなれたのだろう。

自分が一番危惧したのは、日本人が皆自分のような人だと誤解を受けること。いつも、「僕は僕だから」と付け加えていた。バスが、いつか日本に行ってテクノロジーや経済を勉強したいと言っていたが、正直来てほしくないと思った。

日本人は異物を取り除こうとする。普通と呼ばれるものからずれているもの。皆、普通からはみ出さない様に努力する。日本人は、子供から大人まで、平気でそして露骨に異物を取り除く。いじめは典型的な例だろう。いじめは、もともと人間の本能なのだから子供の段階では仕方がないし、それは教育と、「皆と仲良くなる」という指導の転換で、軽減できると考えている。ただ理性を持った大人も平然とやってしまうのが、この国民の怖いところだ。

アジア人、特に有色人種が来たらどうだろうか。必ず取り除こうとする人達がでてくる。外国人の流入を開放していない我国では、優秀なアジア人の存在を知らないで、どうしても＝マフィア（何をするかわからない）のような印象が強いことにも問題はあがあるが、日本人の恥ずべき点の一つ。日本では、東京などお互いに干渉しない地域以外での外国人の生活が可能となることは難しいだろう。

「宗教」

タイといえば仏教である。国民の9割が仏教徒といわれ、上座部仏教といわれるだけあって、日本と違い皆が真剣に取り組んでいる。そ

して、仏教徒であることに誇りを持ち、生活においても実践していることが多かった。バスと電車に乗っていて足の悪い人が物乞いに来た時、これがブッティーズのすることだといって、僕にお金を渡し、彼の持つ空き缶に入れるようにしてくれた。彼らの親切さの根本も、小さい頃から教えられた仏教徒としての教えにあるような気がした。

宗教に対する自分の考えは、宗教とは、人の理性を上げる過程であるというものだ。キリスト教、イスラム教、仏教と呼び名は違って、人が世の中で生きていく過程で、何をしてよくて何をしてはいけないかを語り継いだものということに違いはない。こういうことを小さい頃から教えられることで、自分の中にはどめ(理性)ができる。現在の法律として残っているものは、昔の宗教の教えの一部にあたると考えている。その土地や、人々の考え方の違いで、より受け入れやすいものとして変化し、それぞれの宗教の名前で現在まで伝わっているのだろう。

そのような根本的な考え方を受け継いでいる状態と、日本のように形式だけが受け継がれている状態では、その後の人格形成に大きな差が出てくる。外国では、信仰宗教がないと低く見られる(人格を疑われる)というのもこのへんにあるのだろう。

「タイの朝」

タイの朝は快適だ。もともと緑や池など自然に囲まれたこの大学では、フレッシュな朝を迎えることが出来る。タイは、暑いという印象があるが、それは昼間のこと。朝は非常に涼しく、寝床にはタオルケットが必要だ。やはり、夜の気温もそう高いことはなく、扇風機さ

えつけておけば、涼しい風が入り、快適な夜を過ごすことが出来る。

しかし、昼間の暑さは半端ではない。到着した当時こそ新鮮さもあり嬉しかったが、10日目を過ぎると夏ばて状態に陥り、逆に辛くなっていった。だんだん気温も上がっていき、真剣にどうして人類はこんな環境に文明を築いたのかと悩んだ。いろいろなことがあり、体力を消耗したこともあったが、暑いというのも考えものだと思った。

(3) 学生生活を満喫中 . . . バンコク、ロブリー

ウィークエンドマーケット (2/15) 6日目

6日目、タイに来て初めての週末。パングから一緒にウィークエンドマーケットに行こうと誘われ、昼過ぎ、2人でバスに乗り込みチャットチャックマーケットに向かう。

週末だけに開かれるというこのマーケットは半端な広さではない。食べ物は野菜から魚・肉まで、動物はペット用にか哺乳類から爬虫類、鳥類までひしめき合っている。服屋はもっと多い。ジーパン屋だけで、何十軒とあり、Tシャツから海パンまであらゆる物が売っている。他にも、お土産屋から宗教グッズ販売店、カセットテープ屋と見かけただけでもものすごい数。当然すべてを見ることが出来るはずもなく、たまっていた疲れもあり、休み休みに観覧。ものすごい人と店の数に圧倒されながら、いつか役立ちそうな海パンとパングが買ってくれた彼の好きな歌手のカセットテープを持って帰宅した。



上：チャトチャックウイークエンドマーケット中央広場にて
下：タイの楽器をパングの部屋で練習。同部屋のイーサンクラブのポックに教わる。

この日の夕方は、バスが自分の友達と一緒に外の屋台で食事をしようと誘ってくれ、外出。学校の前の屋台で、ジョイとタムを紹介され、いろいろ話をする。

ジョイは、明るくさっぱりとした女性で、彼女の笑顔は場を和ませてくれた。タムはひょろっとした長身の男。話の雰囲気では、タムはジョイと付き合っているよう。タイの女性の魅力は、小柄な体型に加

え、優しさ、笑顔、そして時々見せるシャイな部分にあると確信。楽しい会食を終え、翌日から始まる悶絶の前の静かな夜を過ごした。



女の子がジョイ。むっちゃかわいく、はい、惚れてましたよ。

悶絶（2/16～18） 7～9日目

楽しい旅が、辛く厳しいものへと変わる。旅行者が語る通過儀礼という奴がやってきた。間違いない、昨日屋台で飲んだ水の中に入っていた氷だ。何度トイレに行っただろう、いつ終わるとも分からない腹下しのため、部屋から1歩も出ることができず。以前約束した買物の予定は、約束した本人が来ず、中止。これで安心して養生できると、どこかほっとする。出すもの出せばなんとかなると思い、一日中ベッドでタイ語の勉強&睡眠に費やした。

翌日、今日も最悪のコンディション。昼頃になっても治る気配さえしないので、日本から持参した薬を飲む。腹下しが止まり、安心したところで、タクシーで15分のところにある大型ショッピングセンターに出かける。到着から1週間、いつまでも大学に滞在するわけにはいかないと、前から考えていたことの準備に。そう、シンガポール行きの航空券を買いに行ったのだ。そして、店内のレコード店で、この出会いを導いてくれた女性オレに何かプレゼントをしたくて、今最もいけるタイタニックのサントラ盤も併せて購入し、帰宅。

安心したのもつかの間、その5時間後、新たな危機に襲われる。腹下しを無理に止めたため毒素が腸で止まったようで、そこから味わったことのないような痛みがお腹に走る。タイより日本の薬のほうが効くというが、その土地の病はその土地の薬で治すべきだった。さすがに辛くて、翌日治らなかつたら医者に行くことを決意し、早めに就寝した。

ついに腹をこわして3日目。やはり治らなかつた。医者に行く気力さえない。とりあえず涼しいところでぐっすり寝たくて、空港近くのホテルのデユーズを利用する。病の時は気が弱いもの。ホテルを利用したもう一つの理由、それは電話をかけること。到着翌日ホテルから電話をして以来、2回目の電話を実家に入れる。「腹をこわして死にそうだ、もうすぐ帰る」、そう伝えた後、予約した23日シンガポール行きのチケットをキャンセルして、24日のパキスタン航空で日本に帰ろうと思い、航空会社に電話した。

60日オープン。その期間、いつでも飛行機を利用できるけど、当

然予約を入れる必要がある。ここで役立ったのが、英語力。電話で話す英会話、さっぱり聞き取れないのである。結局あきらめ、クーラーの効いた部屋で夕方6時まで寝ることにした。

この日の夕方、オレ・バス・その他2人と夕食を食べに行った。オレは始めに声をかけ、この出会いを導いてくれた女の子。あの時以来会っていなかったから、会いたいと以前からバスに伝えておいたことがようやく実現。ところが、さすがにこの体調では楽しめるはずもなく、あまり盛り上がりせずに、アイスだけ食べて別れることになった。

とはいえ、休養のおかげでこの日の夜から回復の兆しが見え始め、夜は現像に出しておいた写真が出来あがったこともあり、今まで撮った写真を見ながら皆でさわいだ。



現像ができたって噂を聞きつけ、いつもいるパングの部屋に皆が訪ねてきて。

観光（2／19） 10日目

完調と言えないまでも、体調はだいぶ回復。今日は、この前食事をしたジョイとタムが観光に連れていってくれるという。どうやらバスは授業があって行けないということ。ジョイのことを少々気に入っていることに気付いたのか、バスに、「タムの彼女だから手を出すなよ」とやんわりくぎを刺された後、出かけることに。

相変わらず天気がいい。というか、乾季らしく、タイに来て雨が降ったことがない。バスで乗り換え地点まで行くと、もう一人参加者が加わる。名はレック。ビジネスの大学で勉強中とのこと。どうやらジョイの友達で、彼らとちょくちょく遊びに行っているらしい。相変わらずタイの女性は小柄で、cuteという言葉が似合う人達だと思いつつ。

この日は、2度目のワット・プラケオ参拝を始め、ウインマーメーク宮殿、ドゥシット動物園と観光地を見て回る。いかんせん病み上がりで、腹の具合を尋ねながらの行動。ご飯も食べる気がしないと相変わらず。ここ3日ほとんど食事をしていなかったこと、30度を超える暑さのためから、かなり疲れてしまい、せっかく連れてきてもらったのに、休んでばかりであり歩こうとせず、悪いことをしたと思う。

動物園では足漕ぎボートで遊覧するなど楽しんだが、この日のメインは別のところにあった。それは、ラマ9世を見たこと。彼の偉業はガイドブックを通じて知っていたし、皆の会話からタイ人皆が尊敬してやまないことをひしひしと感じていたから、国王に会えたことは本当に嬉しかった。動物園の隣が国王の住む宮殿になり、外で帰りのバスを待っていると警察が集まってきて交通整理が始まる。国王が通る

というので、興奮してじっと待つ。しばらくして、一般車が完全に止められ、何台か連ねた黒塗りの車が入って行く。周りの人も、そして自分も、手をあわせて尊敬の念を表す。数十秒後、何もなかったかのようにもとの喧騒とした世界に戻ったが、その瞬間は静寂な中空氣が張り詰めなんともいえない神聖な空間が生まれ、タイにおける最高の出来事の一つとなった。



右から、タム、レック、ジョイ。ワット・プラケオを再び訪問。



ワット・プラケオは、やっぱりきれいで何度見てもいいもんだと。ジョイはタムと付き合っているって言うから、さっさと諦め、レックと仲良くなる。彼女がまたかわいいのよ。だって自然ダブルデートみたいなもんでしょ。この場限りの短い付き合いだったけどね。



ラマ5時代の宮殿にて。釘を一切使っていないという建築方法とその歴史ある建物が有名で、内部では、旧王室の寝室や部屋を見ることができ。諸外国からの贈り物も飾られ、もちろん日本からの品もある。



その後、王宮隣のドゥッシット動物園へ。園内の池には、足漕ぎボート。どうやって乗る？って話になり、ここは男女ペアでって流れを作ろうと思うも、結局男と女で別々に。男女に厳格なタイの空気を読みすぎ、強い押しができないまま。でも・・・、男同士でボート漕いでもね～。

ロブリーへ里帰り（2/20、21） 11、12日目

今日は朝から、シンガポール出発に向けてリコンファーム（予約の確認）をするためセントラルプラザに向かう。前回電話を聞き取れなかった教訓を活かして代理店を訪ねるも、どうやらリコンファームは必要ない模様。この後バスと約束があったから、急いで大学に戻る。

14時、予定通りバスと一緒に大学を出発。目指す先は、彼の故郷ロブリー。彼が実家に連れて行ってってくれるというので、喜んでついて行くことにしたのだ。大学そばの駅から電車に乗りこみ、硬い板の座席に座り続けること2時間、ロブリーに到着。そこからバスで移動。彼の通った高校や、遺跡を紹介してもらいながら、実家に向かう。



ロブリー到着直後にバスと駅プラットフォームで。

バスの父親の職業は軍人。家は、軍関係者が住んでいるという広大な団地の一角にあり、入り口にはバリケードと物々しい警備員付き。彼の家は、二階建ての一軒家。2人で母親手作りの遅い昼食を食べた後、彼の弟2人と近所の子供を混ぜて、サッカーで盛り上がる。

タイで最も人気のスポーツであるサッカーは、あちこちで行われている。久しぶりのスポーツに熱くなり、日が暮れるまで楽しんだ。しばらくして彼の父親が帰宅。家の横に併設している散髪所を使い、自慢の腕を披露ということで、中途半端に伸びた髪を切ってもらった。

夜は、家族皆での食事。家庭料理はさほど辛いというわけでもなく、久しぶりにお腹いっぱい食べる。食後は、皆でプレステ大会。タイでは普通にゲームソフトのコピーが売られていて、一枚150円足らずだから、家には大量のゲームソフトが山積みされている状態。すべて日本語で表示された文章の解説をしながら、朝5時まで、ゲームに打ちこむこととなった。



バス一家。朝出かける前のワンショット。

翌日朝食を食べた後、彼の両親と近くの古城に車で観光に行く。そこは、かつてロブリーが栄えた時代のお城らしく、崩れかかった建物や、歴史資料館で説明を受けながら見学。また、この日はお祭りで、民族衣装を身にまとった人達や、いろいろな屋台などでにぎわい、タイの文化を見て回る。タイに来て12日目、タイに着いた時より日差しは強くなり、気温も高くなっていた。まさに夏ばての状況。あまり観光を楽しめないまま、大学へ戻ってくることとなった。

初めての買物（2/22） 13日目

いよいよ明日はシンガポールへの出発日。「まだいるんだろ？」と聞かれる度に少しずつ伸びていった滞在期間も、後少し。今回日本から持ってきたのは、タイのガイドブックだけだったから、シンガポール・マレーシアの情報を手に入れるため、旅行者の集まるカオサン通

りへ行くことにした。

一度行ってみたかった人種のるつぼカオサンは、これまで訪ねた地とは少し違った雰囲気を漂わせており、いかにもっぽい安宿やカフェを見つつ、古本屋を探して歩く。今までスーパーでの買い物をしたことはあったけど、食事などはほとんどおごり。まだお金の感覚が分かっていなかったため、店で見つけた波打っている地球の歩き方東南アジア編を、定価並みの価格で買うことに。一応値切ってみたが、所詮腰が引けての価格提示。60円程度の違いでは、悩むことなくあっさり売ってくれて。帰って後悔したが後の祭。いい勉強になったなど。

また、この日が最後とあって、いろいろな人と話をした。お互いあまり打ち解けなかった相部屋のアートからは、自分の写っている写真がなかったことから、過去に撮った写真をもらい、ちょっと嬉しかった。バスとパングとは、3人で別れの挨拶をし、日本から持ってきた長野冬季五輪のバッジをプレゼントした。彼らも、自分の宝物や、記憶に残るようなものをくれた。バンコクに戻って来た時はこの大学を訪れる事を約束し、余計な荷物をパングに預けた後、明日の朝にむけて就寝した。

(4) 一人旅開始 ・ ・ ・ シンガポール、マレーシアへ 旅立ち (2/23) 14日目

朝6時半に起き、皆が寝静まっている時間帯に寮を出て、8時前に

空港に到着。シンガポール航空を利用してのシンガポール行き。この日は空港を利用したこともあって、旅出発後初めて日本の新聞を入手。どうやら日本では長野オリンピックが終わったらしい。日本人の活躍が紙面を踊っている。

ここで、旅行初めて日本人と話をする。20台半ばの女性で、喫茶店で新聞を読んでいると、オリンピックはどうでしたかと、話し掛けられて。久しぶりに日本語を話し、今まで言いためていたことを一気に話す。電話番号を交換して日本で会おうと話したが、その後会うことはなかった。やはり、外国にいる時の自分と日本にいる時の自分は違う。会えば盛り上がっただろうが、旅行での出会いはそんなものでいいと思う。

午後3時ついにシンガポールに到着する。宿を決めていなかったため、とりあえず観光案内所へ行きパンフレットを多数入手し、ホテル案内を参考に最も安く、設備の整ったホテルへ向かう。とにかく、暑いタイでクーラーなしの生活、夏ばてになっていた。タイでは、何も用事がない昼間は、ただクーラーにあたるためだけに大学の近くのスーパーに行き、飲み物を注文して時間をつぶしていたりもした。自分のペースですごせるシンガポールでは、少し贅沢をして、自分に休養を与えようと考えていた。

道に迷い、地下鉄で迷い、目的ホテルに着いたのは日が暮れる頃。疲れきって達成感に浸っていると、ホテルの姿はそこになく。既に潰れたらしい。日暮れを前に、突然路頭に迷うことになる。地球の歩き方には、安宿街が紹介されているが、未経験の安宿は避けたいという

気持ち強い。しかたなく中心地に戻り、パンフレットに載っている第2候補の安そうな宿に向かう。そこは立地条件最高のホテルビクトリア。宿賃は、パンフレットの値段と違い結構高かったので粘って交渉するも、疲れていたため妥協。3日で1万6千円を支払い、クーラー・テレビの付いた部屋で快適な夜を過ごした。

シンガポール観光（2／24、25） 15、16日目

慣れていない体に突然のクーラーはきつかった。昨夜は、あつという間に体調を崩し、さっさとクーラーを切ったの睡眠に変更。テレビもつまらないし、部屋から実家に電話できたことだけが救い。

今日はシンガポール観光の日。とにかくマーライオンを見てみようと、地図を頼りにうろうろ。しかし、行き着いた場所にあったのは、小さなマーライオン像。もう少し大きく、りりしいものかと思っていたから、レプリカじゃないかと何度も疑うも、集まってくる日本人観光客に確信を持ち、さっさと他をまわることに。

結局その日は特別見たいものもないので、町をぶらぶら歩き、シンガポールの流行を研究しながら、CDなど日本で買えないものを購入する。元来新聞好きだから、日本の新聞が売っている本屋に行き、買った新聞をファーストフード店で読んだりとのんびりと過ごす。

25日は、明日乗る予定の列車の時刻表を手に入れるため、朝からシンガポール駅に向かう。なんとといっても今回の旅行のメインは、シンガポールからバンコクまで1本で走る、マレー鉄道の旅。とりあえ

ず旅行者が始めに通ると言われる道に参加しにきたのだ。相変わらず道に迷いながら駅に着き目的を達成、その後は近くの中華街を散策した。

「シンガポールで感じたこと」

いろいろな人種を見たが、中国人には魅力というか、ひかれるものがない。みんな性格きつそうだし、自己の利益のためだけに生きているような気もする。タイで親切を受けてきただけに、道を尋ねた女性に話ささえ聞いてもらえず軽くあしらわれたのには、少々参った。シンガポールはきれいだったが、特別なものは何もなかった。シンガポールはどこか東京の冷たい部分の完成型のような空間に近い。東南アジアに喧騒を求めてやってきた自分には、合わなかった。

「暇な時間の過ごし方」

人にはいろいろなタイプがある。その中でも大きく分けると、この二つ。ぼーっとして過ごすのが好きな人、絶えず何かをしていなければ落ちつかない人。そして、間違いなく自分は後者。

ゆっくり時間が流れていると言われる東南アジアでは、のんびり過ごすのがベストの過ごし方。結局、何もせずにのんびりするというのが苦手なため、旅を通じて日本の新聞を探し歩いていた。駅のある町には、思わぬところに日本語新聞が売っているから、いろいろな本屋をのぞいた。特にお勧めなのが日経新聞。これなら平気で2時間近く読み続けることができるし、一番よく売っている新聞でもある。新聞を手に入れたら、ファーストフード店へ。クーラーが効き、食べなれ

た食事は、安心感がある。こうして、暑い昼間の時間帯を過ごしたものだ。

マレー半島上陸（2/26、27） 17、18日目

いよいよシンガポール出発。価格交渉の時は喧嘩腰だったホテルのおばさんとも別れを言い、駅へ向う。当初国境の町ジョホール・バルへ立ち寄るつもりだったが、列車の到着駅と、時間的な都合からクアラルンプールに直行することにする。調子に乗って2等列車を選んだため、またまたクーラー攻めにあったが、20時半に無事到着。

クアラルンプールは、マレーシアの首都。駅はモスクをかたどった豪華な建物で、町も近代的な造り。とりあえず落ち着き先を決めようと旅社という看板を頼りに宿を探す、なかなか空いていない。ようやく空いていたところは、インド人のおじさんが店主をつとめる、一泊800円の典型的な安宿。初めての安宿体験に嬉しくなり、すぐOK。バネの効かないスプリングベッド2つと扇風機・スタンドの付いた部屋。もちろんバス・トイレは別である。

シンガポールはタイほど暑くなく、食事も自分にあっていたため、体力が回復。マレーシア到着初日から、深夜街を歩いてみることにした。マレーシアには深夜屋台が大集結する。服屋から、時計売り、VCDとなんでもそろそろ。近代的な高層の建物があるかと思えば、人間くさいところも持っている。近代化についていけない、庶民の生活がなんともおもしろい。一通り街を歩いた後、明日からのマレーシア観光を想像しながら、宿で眠ることにした。



モスクを模した造りとなっている、クアラルンプール駅

2日目は、いよいよ本格的にクアラルンプールを歩く。マレーシアは意外にも、華僑の町だ。多くの華僑が生活の中心で関わってくる。余計なことを書けば、人数的に少ないマレー人は、政府によって厚遇され、どうにか優秀な華僑から身を守ってもらっているといったところだ。

朝屋台でカレーを食べて、ぶらぶらと町を歩いて人の様子を観察。午後からは、回教寺院に行ってみる。パンフレットに書いてある開館時間に行ってみたが、観光客の姿一つない。どうしたことか中に入ろうとすると、警備員に止められ、「お前は、モスリムか？」と詰問。どうやら、金曜日はイスラムの日らしく、観光客は中に入れないう。しかたなく、楽しみにしていたモスク参拝を諦め、宿に帰って休むことにした。

夜はチャイナタウンに行くなど、有意義にマレーシアを満喫した。



宿のおじさんと。

危機一髪（2／28） 19日目

旅行最大の危機が訪れたのはこの日。昼、ホテルをチェックアウトし駅に向かっていると、突然2人のおばさんに声をかけられる。日本人かと聞かれ、自分の娘が来週日本へ留学するから、日本語を教えてくださいという。話すといい人で、タイで人にお世話になったお返しとばかりに、喜んで家に行くことにする。

途中のタクシーでも、日本通らしく、キムタクなどテレビの話題から、自分がそごうで働いていることや、自分の娘が山口県の大学に留学するという事など、日本の話題で盛り上がる。

彼女の家に着くと、叔父さんや娘など家族に迎えられ、まずは手作りの昼食をいただく。異様に上手な日本語を話す娘に少し引き、なんか嫌な空気を感じ取り、警戒を開始。そして、予感が的中。食後、彼

女の父親がブラックジャックを教えるという。これはやばいと、ようやくその状況を認識する。

何度もガイドブックで読んだ、最近の犯罪の手口。親切な振りをして近づき安心させる。そして、言葉巧みにポーカーに誘い、結局身ぐるみを剥がされるという、そのままの展開が繰り返されていることに。

否応なく、家の2階へ連れていかれ、机の前の椅子に座らされる。彼はカジノで働いていて、日本にもたくさん友達がいるという。そして、その友達は皆自分のおかげでお金を儲けて日本に帰っていったという。しかし、これに乗ったら最後だと思い、机の前で、「I don't play. I don't like gambling.」と必死でアピール。

彼は、自分がいかに公式なところで働いているか、その場に来たら必ず勝たしてやるなどと説明するが、習うだけとか中途半端な妥協をしたら必ずやられると思って必死で拒否。娘も部屋にきて、意気地のない奴だと馬鹿にされるが、そんなことはどうでもいい。数十分のやりとりの後、あまりの固い信念にさすがに諦めて、そのまま一階に戻されることに。

自分が彼らを悪者として扱わず、怖がるわけでもなく、ただギャンブルは自分の信念でやらないんだという意思を貫き通したためか、何事もなくタクシーで駅まで送ってくれた。彼らは最後まで善人を強調し、偽者のサダム・フセインの写真を見せながら（日本人に逆効果とは知らないようだが）、友達だと言ったりしていたが。とにかく何もされなかったし、運がよかったのだろう（昼食をただで食べられたし）。

この日の午後、ファーストフード店で九国大の人と友達になったのだが、この話をすると、それはまじでやばかったよと驚かれた。最近日本人が、詐欺で200万支払わされたというのが旅行者の話題になっているという。それに、平気で出されたご飯を食べたことを指摘されて、最近は、「飲み物に睡眠薬を入れられて気付いたら身ぐるみをはがされ知らないところに放置される」という事件がよくあると教えてくれた。

そう思うと、2階にあがっている間1階に置いていた荷物も、無事だったので本当によかった(荷物にかけていた鍵のダイヤルがずれていて、開ける努力はしたらしかったが)。犯罪に直面したとき。やはり最後まで犯人を追い込まず、逃げるという選択肢を残すような行動をとるべきである、と経験を通じて確信した。

首都出発

いろいろあったが、駅に着き22時発の夜行列車のチケットを取る。出発までまだまだ時間があったので、国立博物館に行きマレーシアの伝統に触れ、夕方にはインド人街の歩行者天国を歩きながら、偽ロレックスやコピーVCDなどを見学し、セントラルマーケットを覗いた後、伝統舞踊の路上ライブを鑑賞して再び駅に戻った。

明日は、夜行列車でバタワースに明朝到着、そこで船に乗換えペナン島を経由しランカウイ島へ行く予定。ペナン島は有名な観光スポットだが、会う人皆があそこの海は汚いというので敬遠。海好きの自分は、一度エメラルドグリーンと呼ばれる南の海を見てみたかった。それだけのために、今後きれいな海探しの旅となるのだが・・・。

出発予定の22時、気合を入れて電車に乗りこむが数百メートル動いた後、突然の停止。理由も分からず、なんの発表もないまま1時間後どうにか無事出発となる。椅子が変形して2段ベッドに変わる寝台列車は、風の入りもよく、快適だった。

ペナン滞在(3/1) 20日目

出発時間一時間の遅れが、旅行の計画変更を余儀なくさせる。もともと予定などなく、気の向くまま動いていたので、どうでもよかったのだが、海に長期滞在するという計画は変えざるをえなくなる。

列車の到着の遅れから、ランカウイ島への船便に乗り遅れ、明日の便を予約して今日の予定を考えることに。ただ、船に乗れなかったショックは大きく、思い入れのないペナンで何をしようかと悩み、とりあえず、近くに砂浜があったのでその上の道路に座ってぼんやりと時間を過ごす。そこでは、砂浜に打ち上げられた木材やごみを、おじいさんが片付けている。せっかくだからと、おじいさんと一緒に1時間程掃除をすることにした。

しばらくして日本人団体客が浜辺付近に到着。きれいな浜を眺める日本人観光客をしり目に優越感に浸って満足する。掃除が終わると、ごみを回収に来たお兄さんがうちに泊まりにこいと誘ってくれたが、明日出発するため、軽く断り、静かにその場から立ち去った。

結局その日は、一泊800円の窓のついた快適な部屋に出会い、安心してペナンの町に繰り出す。ペナンの中心にあるデパートを見学し、街中と人間を観察。ペナンにはいいイメージを持っていなかったが、

のんびりとしていて良いところだと分かる。

この日は、電話ボックスで困っている日本人を発見し、彼と同様電話がかけられず困っていたから声をかけ、夕食をとりながらお互いに旅について話をした。彼は大阪国際大の人で、卒業旅行とのこと。旅で人と出会うのは楽しいことだ。

ランカウイへ（3/2、3、4） 21～23日目

今日こそはと、早起きをして朝8時の船でランカウイへ。ペナンの海が汚いと聞きランカウイへ向かっただけに、エメラルドグリーンのを期待して出発する。船が着くとさっそく客引き。初めは断ろうと思ったが、値段もそう高くないし、悩んだ末に依頼。3つのビーチのうちから1つを選び、バイクのレンタルを断った後、客引きの車で移動する。海の目の前のバンガローを1泊1200円×3泊。海でのんびりしたかったので、長居を決意する。

宿に着いた後、さっそく着替えて海へ行く。ところが、浜辺に人は誰もいない。なんとも寂しいビーチ。海水には細かい喪のようなものが混じっていて、透明度が低く期待はずれ。ただ、砂浜だけは異常にきれいだった。とはいえ、大の海好きとして久しぶりの海を満喫し、満足。明日はきれいな海を求めて近くにある別のビーチへ行ってみようと計画をたてる。

翌日、朝からレンタル自転車を借り、サイクリングがてら違うビーチへ移動する。地図を頼りにいろいろ動いたが、ビーチがあるのはど

うも歩いて10分とかからない場所にだけ。宿のある浜辺と連なる海が特別きれいであるはずもなく、しかたなく砂浜を歩き人間観察。ここは結構栄えていて、多くのビーチボーイが呼び込みをしている。観光客も多く、卒業旅行らしい日本人女子大生の群れが騒いでいたりもする。求めていたものが得られず、しかたなく元のビーチに戻りまた泳ぎ続けることに。

日にあたりだして2日目、一気に焼こうと思ってサンオイルを塗ったのが失敗だった。元々肌が弱いこともあり、日焼けで体がひりひりし始め、とてもじゃないが耐えることができなくなり、海水浴を中止。部屋にいても暑いだけなので、午後からは近くのショッピングセンターに行き涼しみつつ時間を過ごす。

ところで今日は、国際フォンカードというものを手に入れ、ようやく公衆電話から実家に電話をする。1週間に1回のペース。電話するたびに、心配をかけているのが分かるが、かけられないものはかけられないのである。

ランカウイ3日目。3泊宿を予約したことを後悔しつつ、最後の海だと思って泳ぐ。午後に泳ぐと日差しが強くて体が痛くなるので、日焼け止めを塗って午前中に泳ぐことにする。午後からは近くの水族館に行き、見たこともない魚を鑑賞しつつ、その後浜辺の木陰で休み、18時位から夕日を見るべくまた泳いだ。

夕日というのは何か人をひきつけるものがある。その時間になると近くに住んでいる人達が浜辺に集まりだし、何を言うわけでもなく沈むまで静かに見守りだす。ただどこまでも大きな夕日を全身で受け入

れる人々の姿に、人の心にある共通の感覚を感じさせられる。沈みゆく太陽の前に、人間のおもしろさと自然の尊さを感じながら、ランカウイの海を見つめた。

この日の夕食は、オーストリア人のおじさんと一緒にとる。いつも浜辺で見かけるおじさんで、今日写真を撮ってもらおうと話しかけた後仲良くなったのだ。彼はオーストリアのホテルで働いていて、シーズンオフで休みとなる1～3月に、2ヶ月かけて台湾・香港・バンコクなどを旅行しているらしく、その過程でここに寄ったのだという。ビール好きの彼から、ビールを一本分けてもらい、浜辺で飲みながら話をした。

話の途中、近くにいいレストランがあるから一緒に夕食を食べようという話になった。その店主とは仲が良く、自分でも料理を作ったりするという。しかし、この話を聞いた瞬間思ったのが、あやしい。クアラルンプールでのことから、親切に誘われるとそう思ってしまう。また、少なくともレストランで食べると夕食予算の120円以上はしそうだと思い断るが、そこも安いという。

悩んだ末、場所が分からなければよそうと思いかけると、宿のすぐ目の前に店を発見。店に入ってメニューを見ると、ウエスタンフーの店で、また高い。しかたなく、安そうで、量もありそうなフライドライス200円を注文。飲み物を頼まずにいと、少し酔っ払った彼が来てスプライトを奢ってくれた。それでも、明日のタクシー代及び船代を考え、出費の大きさを痛感しつつ、飯をたいらげた。ところが、勘定を頼むと、お前は彼の友達だから無料でいいよと200円を

返してくれた。当然貧乏な自分は断ろうともせず、彼と握手をして感謝の言葉を連呼し、また会おうと言って店を出た。

彼はただのいいおじさんだった。人の親切を受け入れなかった自分に恥じ、一期一会の偉大さを感じながらランカウイ最後の夜を過ごした。



オーストリア人のおじさんに撮ってもらった写真。いつも泳いでいた海をバックに。

(5) 国境横断 ハジャイ、スンガイ・コーロク、コタ・バル タイ再入国 (3/5、6) 24、25日目

ついに戻ってきた、タイランド。この日は朝9時半のフェリーでランカウイ島を出発し、サトゥンの港に到着。そこから、バイクタクシーと乗合バスを使ってタイ南東の町ハジャイに向かう。やっぱりタイの女の子は魅力的だ。バスの待合室でいまいち状況のつかめない自分

に話しかけてくれて、バスに乗るまで仲良く世間話。バスの中では運転手の親切？で席の広い助手席に乗せられ、彼女の隣で移動中の楽しい会話が出来なかったのは、本当に残念だったこと。

ハジャイは観光名所などないが、マレーシアとの国境の町というだけあって、いろいろな人と物があふれている。屋台で食べるタイ料理と、タイ人の優しさに触れ、タイに戻ってきたことを実感する。ここでは、立派で安い宿を見つけることができ、さっそく昼から町の散策に。普段日本人を見かけても声をかけないけど、途中道に迷っている2人組を見かけ、声をかける。彼女達はガイドブックに書かれている宿を探している様子。はじめに道を教えていたタイ人がえらく熱心なので、邪魔しちやいかんかなと、現在地と方角を教えて、その場を立ち去る。

とはいえ、いい事をしたと満足しながら町を歩き、新聞などを手に入れのんびり過ごす。夕食後、音楽を聴ける環境を作ろうとウォークマンを買いに行き、そこの店員さんと気が合いしばし談笑。ついでに、この日から日焼け後の皮がむけ始める。

2日目は、本格的に顔の皮がむけだし、人前に出られる状態ではなくなってしまう。しかたなく人間並みの顔になるべく皮をむき、昼から次の訪問地コタ・バルへの行き方を知らうと、観光センターへ行く。ここで、あっさり行き方を教えられたので、急にすることがなくなり、再び新聞を読んで過ごす。この日の夕食はスープ麺。しかし結局腹が減って、ケンタッキーに買出しに行くという2重の出費に。

「日本人との関係」

旅を通じて日本人と話しをしたのは数少ない。第一に、一人でいる人に声をかけることはあっても、集団でいる人の中に入って行こうという気はなかった。よく言われることだが、日本人というのは外国にいと自然と集団を形成し、一緒に行動したがる。人と同じことをやっていると恥ずかしくないという習性からか知らないが、見かける日本人も、ほとんどが2人以上のグループで行動していた。当然話しかける気もせず、気が向くままに一人で行動し続けた。

ついでに、旅行を通じて気付いたことは、自分が日本人顔ではないこと。話をした日本人には韓国人かと思われ、現地人には中国人・現地人と間違えられることが多かった。クアラルンプールで連れていかれた日本人を狙っていたおばさん2人組にも、日本人であるかどうか自信がなかったらしく、目が小さいからそうかと思っただけにやけに喜ばれた。

華僑の人に声をかけられたのも数知れず。道案内まで頼まれるんだからよっぽどのことだろう。タイでも、買物をタイ語でしていたこともあり、突然タイ語の会話を浴びせられるたりもした。タイ人かと思っただけと思われ、悪い気はせず、いつものように微笑を返すわけである。

そういう理由で日本人に声をかけられなかったこともあるが、日本人と思われたいことは何かと便利だった。値切り交渉は楽だし、へたな犯罪にも巻き込まれにくい。日本じゃ意味無いことだけど、海外では役に立つことだった。

国境横断（3／7） 26日目

いろいろ悩んだが、どうしても国境を歩いて渡りたくて、もう一度マレーシアに行くことにする。ホテルを出て昨日観光センターで聞いたバス乗り場を探したが見つからず。観光センターにもう一度行って聞くが、教えてもらったところにはやっぱり何もない。周りの人に道を尋ねてようやくバス停にたどり着いた。

タイ人は真剣に適切なことを教えるから辛いものがある。結局正確に場所を言った人は一人もいなかった。だが、皆自信まんまんに答える。そのルーズさが良いところでもあるが、おかげで予想以上の時間と体力を費やすことにしてしまった。

ようやくバスに乗り込み、4時間かけて国境のある町スンガイコーロクに到着。入国カードを記入し、念願かなって歩いて国境の橋を渡った後、宿泊予定地コタ・バルに向かおうとバスを探す。待っても待ってもコタ・バル行きのバスは来ないはずで、壁の時刻表に書かれているのは、既に時間を過ぎている最終バスの出発時刻。近くには宿もないし、外国人などほとんどいないため、へたしたら野宿かなと思いながら大通りを歩く。しばらく歩くと人通りがなくなり、宿探しを諦めた頃に、ようやく宿を一つ見つけ、宿泊を決定。今旅行初のドミトリー（大部屋）利用となった。

一泊400円とさすがに安い。ただ結局泊まる客が自分一人なため8人用の部屋を独り占めとなり、いろんな人が入り混じるドミトリー気分は味わえずに終わる。とにかくこの日は、あまりの疲労と精神状態の悪さから、本当にきれいな1日だった。



タイとマレーシアの国境線となる橋の上で。

コタ・バル突入（3／8） 27日目

朝早くからバスに乗り、待ちに待ったコタ・バル行き。コタ・バルは期待通りマレー人の多い町で、クアラルンプールともペナンとも違う落ち着いた雰囲気があり、非常にゆったりとした時の流れを感じる。

町を散策した後、「気分が落ち着いた時に、マレーシアほど自分に合うところはない」と実感。どこか日本のようである。話せば親切でいい人だが、普段はお互い干渉せず、つんとしている。なんとも居心地がいい。人間の純粹さというところでは田舎のような感じでもあり、気に入る。

昼間は、市場が入った建物を見てまわり、夜はナイト・マーケットでお祭りのような雰囲気を楽しむ。ただ、マーケットといってもほと

んどが飯屋。明日はこの町を出る予定なので、ここぞとばかりに多くのマレー料理をおなかに入れ、腹いっぱいになる。

時差（3／9） 28日目

東南アジアはご存知のように日本のほぼ真下。そのため時差はほとんどない。タイで－2時間、シンガポール・マレーシアで－1時間。

この日は、朝7時半に起きてスンガイコーロク発の電車の時間に余裕を持って出かける。今日はスンガイコーロクからハジャイに電車を利用して戻るというのが目的。ハジャイの町を気に入っていたので、もう一泊しようということで。結局1時間の時差を考慮に入れなかったため、スンガイコーロクで時間つぶしを余儀なくされる。ここは本当に国境というだけで何もなく、食事をしたり、適当に町並みを見たりして時を過ごす。

ハジャイに着いてからは、疲れをとるため部屋で休養。夜からは、電池を買いにウオークマンを買った店に。この店員さんとは前回仲良くなっていたから、今回も長々と店締めまで話をし、その後食事に行こうということになる。彼女は、中国系タイ人で年は25、大学に行った後おばさんの店を任されて働いているという。勤務時間は、毎日朝10時から夜9時半ということ。とりあえず彼女のスクーターの後ろに乗り、少し離れたところにあるおしゃれなレストランへ。

店に来る前にご飯を食べていたため、あまり食欲はなく、カクテルを注文。店内は明かりが薄暗く、机においてあるろうそくがぼんやりと輝いている、いい雰囲気。店内でジャズバンドが演奏をされていて、

客のリクエストに応じている。

もう少し会話を盛り上げればよかった。疲労のたまった体と、ろうそくの明かりに包まれた幻想的な雰囲気、体に響く音楽のため、一杯のカクテルでほろ酔い気分となる。ぼーっとしてきていい気分、一人で音楽に聞き入る。あんまり自分の世界に浸っていたためか、彼女から「先に帰るからもう少し聞いていけば」と冷たい言葉。やばい、そのときはもう一つの悩みがあった。金がない。日頃から多くても1500円位しか持ち歩いてないのに、電池と音楽カセットを買ったため、残り600円。もしかして割り勘かと期待した自分が甘かった、もちろんこっちは持ち。どうにか店に金を払え安心したのもつかの間、もしこれで彼女に帰られたらホテルに帰れない。彼女が「タクシーがたくさん走っているから大丈夫だよ」というなか、どうにか引き止め連れて帰ってもらおう。

今考えれば、最初自分の泊まっている宿と一緒に飯食べようって誘われてたんだよな。相手の真意が読めない段階で、積極性を出すタイプじゃなく……。何事もないまま、ただの思い出として記憶に刻まれることとなった。



(6) 苦楽 ……クラビー、ピピ、プーケット

エメラルドグリーンを夢見て (3/10) 29日目

今回の旅で一番悩んだ分岐点はここだった。マレー鉄道に乗り続けるか、脱線してきれいな海を見に行くか。いろいろ悩み、マレー鉄道完全制覇の夢を捨て、エメラルドグリーンの海を探すことを決意する。場所はピピ島。ここは、タイの大学生に素晴らしいところだからぜひ行ってみるといわれた所で、どうしても立ち寄ってみたかった場所だ。

朝9時に来いという昨日訪れた代理店の言葉を信じて行くと、チケットがないと言われる。これ以上ハジャイに泊まるのも嫌なので、他の店に行き、午後1時発の便を予約。しかし、この便もピピ島行きではなく、結局ピピ手前の港クラビーまでのバス旅行となる。

バスとは名ばかりの小型ワゴンに乗せられ、4時間の移動。今日は朝から疲れていたし、めんどくさいので誰とも話す気にならず。そんな中、このバスで出会ったのは2人の女の子。年は17歳だという。彼女達は終始元気で、バス中でも話をしたり歌を歌ったりしている。正直うるさいなと思いつつ横でポーっとしていると、流れるに隣に座っていた自分にも話しかけてきて。ただ、やはり話すといい人達で、いい人達と接すると自分も素直に影響されるありがたい性格なこともあり、それまでのストレスみたいなものが吹き飛び、一気に和む。

彼女達は歌手で、チェンマイ出身。クラビーのバンガローに歌いに来ているという。写真を交換しようというので、バンコクで撮った写真をあげ、裏に偉大な歌手になって日本に来てくださいと日本語でメッセージを贈る。本当に明るく純粋な子で、もっとたくさん話しておけばよかった。盛り上がっているところで到着し、2人の写真を撮

ることができなかったことも、後悔の一つだ。後で聞けば、彼女達のように東北出身の貧しい女の子の多くが、歌手として働いているという。彼女達の明るさがあれば、きっと成功すると信じるばかりだ。

到着後は、明日の船の予約と今日の宿泊地を決め、町をぶらつく。なんとも落ち着いた港町で、それなりに栄え外国人の姿も見られる。夕日を眺めた後、久しぶりに見る海を眺め、のんびりと時を過ごした。

いざピピへ (3/11) 30日目

今日は、ついにピピ島に到着。クラビーの港でサンドイッチを売っている日本人女性と話をしたが、現地で働く日本人はかっこいいものだ。ピピ島では、到着と同時にあふれる客引きの一人について行き、宿を確保。ランカウイでの失敗もあり、とりあえず2泊を予約、気に入れば延長ということで話をする。

バンガローは、海から2、3分で、値段の割に立派なもの。さっそく海に泳ぎに行く。そこには、まさにエメラルドグリーンの海が広がっていた。嬉しくなり、水中眼鏡をつけて泳ぎ続けた。ただ唯一の不満は、あまりに海が浅いこと。どこまでいってもほんとに浅い。そういう地形だから仕方がないが、泳ぎ好きとしてはちょっと残念で。

もう少し金を出して、もう1箇所のビーチに行った方がよかったかなと思いつつ、海を満喫。とにかくこの海は南国の隠れたリゾート。ほとんどが外国人だし、タイ人は働いている現地人が主。浜辺には、映画でしか見かけないトップレスの女性が歩いている。まさに南海の楽園であった。

ツアー参加（3/12） 31日目

昨日は最後まで悩んでいた。シュノーケルのツアーの参加料1200円、値段的には全然OK。ただ、ツアーといのが気にかかる。知らないグループとの余計な心労を避けたいと思いながら、こんなチャンスは2度とないと無理やり自分を納得させ、参加を申し込んだ。

朝8時半に集合して船に向かう。そこで、昼の弁当や、ジュース、足ヒレとシュノーケル道具一式を渡され船に乗り込む。白人グループなどもいたが、唯一の1人身を考慮してか、タイ人グループに入れてもらう。ピピ島を離れ、無人島のバイキングケープを見学し、そこにあるというツバメの巣を見せてもらう。かつてテレビで見た場所だと感動しつつ、船で仲良くなったタイ人グループに写真を撮ってもらう。

乗った船には2つのグループがあり、1組はカップル、最後まで2人だけの世界を作っていた。もう1組は、スコータイ(北の方)近くに住む社会人で20歳の女の子5人組。彼女達とは仲良くなり、孤立せずほっとした。

その後、ポイントでシュノーケルをし、きれいなサンゴ礁を見たり、魚達が泳ぐ姿を観察。とにかく海自体がきれいだから、ほんとに楽しい。タイ人といえば仏教徒。どうやらあまり肌の露出はよろしくないらしく、皆シャツに短パンという普段着のまま海で泳いでいた。ついでにカップルの1人、男もシャツを着て泳いでいたのには、少々驚いたが。昼は離れ小島である無人島に行き、昼食をとる。とにかくほんとに透き通った海に乾杯である。ここでは、6ヶ国語を操る中国人の機長さんを通じて、彼女達と深い会話をした後、もう一度シュノーケルをして港に戻った。



上：お昼の弁当を食べた無人島で。理想の海が目の前に広がる。

中：仲良くなった OL さん達と一緒に行動して、楽しいときを過ごす。

下：白い砂浜にきれいな海、木造の船が周りの景色に溶け込む。ちなみに、この船がこのツアーで利用したもの。木船にモーター取り付けられた頼りない船で、結構なスピードですからスリル満点。

夕方は、潮が引いた後にできる浜辺で毎日やっているサッカーに参加。現地人が中心だが、旅行者も混じり結構真剣な試合。毎日やっているだけあって、やけにうまい中年のおっさんがいたり、ブラジル人とイタリア人が張り合っていたりと、久しぶりに汗を流し楽しく充実した1日となった。

再び来襲（3／13） 32日目

タイ料理で思うこと、それは基本的に量が少ない。暑いのであまり食欲がなくなり、いつもは少量でいいのだが、泳いだ後などは、腹が減って仕方がない。まあ、その量のおかげで女の子は皆小柄だし、男もやせているんだろうけど。

と思いつつ、ついにまたまたやってきた。これさえなければタイはほんとにいいとこなのに、何が原因か分からない。昨日はいろいろ食べ過ぎた。もらった水か、夕食の焼魚か、そのとき飲んだオレンジジュースの氷か、そう、腹を壊したのだ。

とにかく朝から止まらない。このため、今日は何もすることができず、無駄な時間が経過していく。このこともあり、時間的なことから

も21日に帰国しようと決意するが、電話する力もない。最終日に予定していたタイ式マッサージも、1時間耐える自信がないため取り消し。気持ちも悪く最悪の1日だった。

プーケットへ避難（3／14） 33日目

朝3時、吐いた、死にそう。朝になるまで、下痢と嘔吐の連続。これはやばい。もう一泊この島に留まることをあきらめ、プーケットの病院に行くことを決意。少し動ける状態になったところで、船のチケットを取り、ピピ島を後にする。いまいち胃はぱっとしないが、下痢は止まったようなので、プーケットで数日休養をとることにし、少し贅沢なホテルに泊まることにする。

ついでに、パキスタン航空に電話。オープンチケットなので、帰りの便を予約しなければならないのだ。しかし、相変わらず電話がつながる心配がしない。人の家につながるし、いったいどうしろというのか。

午後からようやく食欲も出てきたので、無難なファーストフードを食べて過ごす。しかし、食べれば出るもので、まだ下痢が止まってないことが分かる。体力的および精神的な辛さは変わらず、1日を過ごす。

これぞタイ（3／15） 34日目

今日も昼間いろいろと試したが、パキスタン航空に電話が通じない

ため、弱気な自分に活を入れ、スバルという日本食屋で相談することにする。しかし、今日は店長さんが出かけていて、明日戻ってくるとのこと。かわりに、おじさんが話しかけてきて、仲良くなり遊びに連れていってもらおうこととなる。

まずは、すでに都庁を中途退職して、タイ暮し2年目というおじさんが行きつけにしているクラブに行く。しかし、そのクラブのホステスは、タイ語しか話せない子ばかりで、楽しそうにしているのはおじさんだけ。いまいち会話が盛り上がり、お酒を飲まずにコーラばかりをすすり、雰囲気だけを楽しむ。

その後もう一軒連れて行ってくれたのが、ホステスさんのいるビアガーデンといった感じの場所。ところが、ここもほんの少しの英語が話せる人がいるのみで、いまいち会話にはならない。ステージでは歌を歌っている子がいて、客からチップをもらっている。クラブであった女の子もこんなところで働いているのかなと心配しながら、コーラを飲んでいた。

問題はこのおじさん。かなり酔っ払っている。いつもここから帰ると、お金がなくなってるんだよといい、どうやらぼられている様子。この人にも問題があるようで、チップの花束を巡って、ボーイともめだす。なんかいきがったボーイだったので、自分も参加して一発触発。まともな人が出てきて場をおさめようとするから、それにこしたことはないとお互いの問題点を洗う。酔っ払い過ぎ、意識の不確かなおじさんをなんとか諫め、お店の人と話をつける。

会計自体明朗だったのは、初めて来た自分に好印象を与えるためか、元々そうなのかは不明。このおじさんとは、彼の生き方や考え方を聞

いたり、今の日本の現状について語ったりと、久しぶりに熱い時を過ごした。ただ、本気で蛇行運転するこのおじさんの酔っ払い運転を体験したため、帰りは気持ち悪くなってしまったが。

三度来襲（3／16、17） 35、36日目

今日の朝になってぶり返した。いろいろ悩んで、病院に行くことを決意。そこまで酷くなかったが、いつまでたっても治らないし、クレジットカードの保険で治療費が無料になることを知っていたから。病院の施設は立派で、ホテル暮らしよりよっぽどいいと聞き、一度体験してみようという気持ちもあり。

日本人職員のいる病院を選び、タクシーで移動。ほとんど食事をしていなかったため、1日入院して点滴を受けることに。与えられた個室はきれいでバス・トイレ付き、冷房も効いているし、テレビもあるのというわけではない。入院グッズ一式を渡され、着替えた後部屋で休養を取る。

しかし、楽しかったのもここまで、直後に点滴が始まる。なんともいやな感触、どうもしっくりこない、違和感を覚える、痛い。落ち着いてテレビも新聞も見ることができずに、なるべく寝て、時間が早く過ぎるように努力する。夕食も朝食も、人間の食べる物ではなかった。途中で目が覚め、その度にいやな感触を思い出しつつ、ようやく朝を迎えることができた。

そして、朝の検診。もう1日入院した方がいいと言う先生の意見など無視して、必死で退院をせがむ。ようやく脱出。ベビーパウダーや

ブラシ等、少々の付属品を失敬して部屋を後にした。

ここで会った日本人の病院関係者えみさんには本当にお世話になった。帰り際、パキスタン航空に電話してもらい、予約について聞いてもらった。外国語を上手に操る女性、かっこいいものである。結局4/3まで席が埋まっていて、乗ることはできないという。60日オープンであることと、大学の都合から、遅すぎると判断し、他の航空会社を探すことにした。

プーケット市街に戻って、明日のバスと帰国用に新たに中華航空の便を予約。この日は、ホテルに帰っても、点滴後の腕の痛みが取れないので、ひと寝入り。その後回復しても、食欲はそんなにないし、買物する気も起きず、何もすることがないまま時計と睨めっこをしながら暇なときを過ごした。

移動（3/18） 37日目

今日は、朝8時にホテルからミニバスに乗り、長距離バス乗り場に連れていかれ、そこを9時に出発。欧米人の御一行で、この旅初めて見た本格的な大型バスにらしさを感じつつ、つまらないバス旅に。プーケットからはバスでバンコクまで戻れるが、長時間のバスは嫌だし、今回の旅の楽しみは鉄道旅行なので、遠回りになるがスラターニーという駅に向かうことにしたのだ。どこか冷たさを感じる欧米人とは打ち解けることなく、13時頃スラターニーの町に到着する。

しかしここで話がこじれる。このバスはバンコクへ直行だと言う。ここはただの休憩所。バンコクへ行く方が安いし、ここで下りるなど言う。こっちは、そんなことお構いなし。自分には自分の計画があるときささと荷物をバスから下ろす。ここでまたまた問題。バス乗る前にチケットを店の人に渡したのに、運転手がチケットを見せろと言う。当然持っているはずがない、それを説明。しかし分かってくれない。だんだん腹が立ってくる。怒鳴りあいになる。少々朝から機嫌が良くないのに加え、こっちは正しいのは確かだから、言いたい放題。本気で英語でどなりまくり、日本語で言や「ふざけんな、冗談じゃない」って感じできれきれ。さすがに向こうも引いてしまい、それなら駅まで遠いから、タクシーに乗っていけと言う。しかしそのタクシー代が900円。ここまでのバス代が750円なのに、ここぞとばかりにぼってきたなと思い、他のタクシーを捕まえると言い突っぱねる。ところが、それでは引き下がれないとばかりに言い寄ってくるので、しかたなく妥協。そんなに距離はなかったが、お金を払い、ようやく駅にたどり着いた。

バンコクまでの夜行列車が出るのは4時間後。何もない町で暑い中での時間つぶし。飯を食ったり、コンビニに入って涼しんだりして過ごし、ようやく列車に乗りこむ。15分遅れて発車したと思ったら、当然のごとく停車してしまい、そこから2時間動かなくなる。それも慣れたもので、いつかは出るだろうということでのんびり休憩。その後は、順調に走り、快適な寝台生活を送ることとなった。

(7) 思い出を残して

バンコク再訪（3／19） 38日目

ついにバンコクに戻ってきた。結局3時間遅れの到着となったが、無事で何より。バンコクの中心駅・フォアラーポーン駅に荷物を預け、サーヤムスクエアに行こうと思うも、バイクタクシーの兄ちゃんのしつこい勧誘に負け、先に大学に行くことにする。

危険な走りをするバイクの後ろに乗り、大学に到着。みんな元気かなと思いきやドミトリーに行ってみると、やけに静まり返っている。予想通りというか、ファイナルテストが終わり春休みに突入、大半の学生が実家に帰ってしまったという。出発前、ファイナルテストが3月半ばにあるというので、あまり早く帰ってきては邪魔になるかと思いきや、遅らせるつもりだったが、いろいろあって遅れすぎたようだ。テストが終われば暇になるだろうから、どこか遊びに行こうかと思っていたのに、大失敗。

どうにか泊まるドミトリーだけは確保できたが、いつも一緒にいたバスとパングがいなくて、彼に預けておいた荷物はどうしようかと思いきやさらに不安が募る。ついでに、午後はお土産を買いに一人で買物に。まず手始めに、スーパーで、食品など日本で手に入らないものを入手した。

夜は1人で過ごしていたら、バレンタインの時など一緒に過ごし仲の良かった友達のウィーが、タイ東北部から帰ってきて、自分がいるという噂を耳にし、部屋に遊びに来た。ようやく、聞かせたかった旅の話で盛り上がっていると、もう1人男性が入ってきた。一瞬学生か

と思ったが、よく話を聞くと体育の先生で、以前日本に4回行ったことがあるという。

彼は、かつてタイ代表の野球選手で、広島で行われたアジア大会に参加したという。今はひざを壊して、ソフトボールのコーチをしているらしい。文化施設や料理のことを二人で話し、周りの学生に説明をしていた。お好み焼きだけは、どうしても合わなかったようだ。また、写真を通して、日本についていろいろ教えることもできたので、本当に良かった。彼には、その時出会った学生とまた交流がしたいので連絡をとってほしいと頼まれ、学校名と相手の名前が分かったら橋渡しできるよと伝えたが、それ以来部屋に来なかったのでどうすることも出来なかった。

タイ人は、見た目無表情でとっつきにくい感もあるが、話をすると皆いい人ばかりだと改めて実感した。

バンコク中心街へ（3／20） 39日目

今日はお土産探しにバンコク中心街へ出かける。昨日、バスの乗り方やショッピングセンターの場所を聞いておいたので、そこへ向かう。

基本はサーヤムスクエア周辺。通称バンコクの原宿。人気のエリアというだけあって、若者を始め、むちゃくちゃ人があふれているし、周辺には半端じゃない規模のデパートが並ぶ。とりあえずタワーレコードなどを見つつ、ワールド・トレード・センターに行き、タイシルクを購入。広いデパートの観光を楽しみ、マーブンクローン・センターへ移動。ここは一転大衆的な品物を売っているショッピングセンタ

一。服や、P Sのソフトを買う。こちらの方が性にあっていて、だっぴろい店内を歩き回る。

やっぱりバンコクは見てまわるだけでも楽しく、予定としては余った時間でチャイナタウンやお寺に行こうと思っていたが、この周辺での買い物だけとなってしまった。結局、友達と遊ぼうと思っ少し余裕をもって帰ってきたのに、買物だけで潰すこととなった。

最終日（3 / 21） 40日目

そして最終日を迎える。最後の買物地を選んだのは、チャトチャックウイークエンドマーケット。前回面白い品をたくさん見かけたので、もう一度訪れようと心に決めていた場所だ。

5週ぶりのチャトチャックは、予想を裏切らずに、すごい数の人々でごった返している。そして、デパートにはない、自分好みの品が大量に揃っている。さすがに3時間近く歩き回り疲れたが、大衆雑貨の宝庫であるここほど興味の尽きない場所もない。タックローという伝統スポーツのボールを買ったり、ブーメランを思ったほど値引けず諦めたりと。

タイ語で買物や値引き交渉をしていたから、自分も楽しめたし、相手にも喜ばれた。やはり、現地語での会話は、喜ばれるものだ。また、タイ人と間違われ、タイ語でいろいろ話しかけられたが、全然理解できなかったのは、本当に残念だった。

このウイークエンドマーケットは、観光客を対象としていない、地元の人メインの場所だから、要注意。タイには珍しく、英語を話せな

いばあちゃん達が物を売っているから、多少のタイ語知識は仕入れておきたいところ。電卓があれば、事足りたりもしはするけど。最後だから、金を使ってもいいやと思っていたが、予想以上の出費となった。

思い出

長かった旅行も今日で最後。旅行中、正直、楽しいと感ずることよりも、辛いと感ずることの方が多かった。帰りたと思ったことも何度もあった。でも、日本に帰れば、楽しい思い出になるはずと思っ、乗りきった。

どこで知らせを聞いたのか、パングが戻ってきて預けていた荷物を渡してくれた。学校にいた、自分と関わった人達にお別れを言った。いつか日本に行った時は案内してよと言われてたので、もちろんと答えた。

タイにおいて、大学へ進学する割合は6%程度。特にこの大学は、東北地など田舎からの学生が多い。お金持ちの学生は少なく、お世話になったパングも決して裕福ではなかった。でも、自分に対する親切に限りはなかった。毎日の食事から、外での外食、電車賃まで、すべて彼らが払ってくれた。断ればいいのかもしれないが、彼らの親切を素直に受け入れることだけが自分にできることだった。仮に彼らが日本にくることがあったら、僕は支援を惜しまないだろう。彼らはそれ以上のものを自分に与えてくれたのだから。

本当にいろいろな経験をすることができた。偶然が重なり、夢のような体験ができた。彼らとは今でもEメールで連絡を取り合い、2000年3月に再訪する予定だ。まぎれもない親友だ。

いろいろなことを感じながら、明日の出発に備えて、早めに寝ることとした。

TOKYO JAPAN (3/22) 41日目

朝8時半の便に乗るため、5時前に起きる。昨日酒を飲みに行っていたらしいルームメイトが、床にビールをこぼし、自分のバックにも少しかかっていたが、気にせず用意に取りかかる。パングには旅行中借りっぱなしだった短パンを洗えずに返すことを後悔しつつ、部屋の椅子にかけておく。そして、朝のラッシュを気にして早めに大学を後にした。

バンコクの朝は涼しいくらいだ。2月末の照りつけるような暑さがなくなり、昼も過ごしやすくなっている。ドム・ミアン空港に行き、チャイナ航空に乗る。空港で、お土産と新聞を買った際に、タイ語で対応したら、店員さんもタイ語で答えてくれ、少し親しくなり最後の思い出を作ることができた。7時間後、台北を経由しつつに東京に到着した。

東京は3月の終わりだというのに、異常な寒さ。外では小雨が降り、景色全てが灰色に見える。人も町も冷たいところだ。素直にそう見えてくる。皆が無愛想に、自分のことだけを見て生きている。もうここは、青や緑の原色に彩られ、降り注ぐ太陽で光り輝いている景色も、街中にあふれる陽気な人々のほほ笑みもない、日本なんだ。目の前に広がる景色に現実を突きつけられる。なんとも寂しい町に思えてきた。

(8) まとめ

こうして、自分の旅は終わった。自分の感じたこと、旅での出来事をここに書き記した。もっと早く完成させたかったが、時間の都合から、1年半遅れてしまった。これを読むことで、自分の人間性も見えてくると思う。

ただ、この細かい文章を最後まで読み通した人には、ご苦労様の一言である。これを読んで、東南アジアへ興味を持ち、旅の選択肢の一つになってくれたら本望である。ヨーロッパやハワイになど年をとってからも行ける。アジアの熱さを感じ取れるのは、若いうちだけだ。

人間を感じてほしい。一生懸命生きている、純粋な人達を見てほしい。いつか、どこかの町で皆さんに会えることを楽しみにしている。きっと自分は、hiroの名で、どこかの宿に滞在していることだろう。

それでは、また会う日まで。SEE YOU AGAIN!!